

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 17 日現在

機関番号：22301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22720143

研究課題名(和文) 中国斉梁時代の「艶詩」の新研究

研究課題名(英文) A new study of love poetry in the Qi-Liang Dynasty.

研究代表者

大村 和人 (OMURA, Kazuhito)

高崎経済大学・経済学部・准教授

研究者番号：80431881

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円、(間接経費) 390,000円

研究成果の概要(和文)：中国南朝斉梁時代には艶詩の制作が流行したが、隋代以降、斉梁の艶詩は儒教思想から乖離したものであるとして厳しく批判されてきた。しかし、本研究の成果から、南朝梁の蕭綱らの艶詩作品とその制作を支えた思想の両者ともに伝統的な儒教思想に基づくものであったことが確認された。この成果は、蕭綱らの艶詩が儒教思想から乖離したものである、という従来の説に再考を促すものである。

研究成果の概要(英文)：The following facts were clarified by the investigation and the analysis of the characteristic of love poetry written by Xiao Gang in the Liang Dynasty and his thought ; they were based on Confucianism. This paper will add another viewpoint to the previous studies, by pointing out the fact that love poetry written by Xiao Gang in the Liang Dynasty and his thought were not remote from Confucianism.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、各国文学・文学論、中国文学

キーワード：中国古典文学 魏晋南北朝 艶詩 儒教 文学思想 言志

1. 研究開始当初の背景

中国詩史における黄金時代は唐代(618-907年)とされるが、それより少し前の齊梁時代は、近体詩の条件の一つである韻律の規則の元となる聴覚上の工夫が試み始められた時代であり、唐代に完成される近体詩の基礎を築いたと評価される。また、この時代には、『文選』や『玉台新詠』といった大部のアンソロジーが編纂され、『文心雕龍』や『詩品』といった体系的な文学理論書や文学評論書が現れ、それまでの文学や文学思想を総括し、集大成しようとする動きが活発にみられたことが特色の一つとして数えられる。

一方、このような時代に流行した詩歌は、女性を主な題材とした艶詩であった。この齊梁艶詩の流行には、梁の武帝蕭衍(464-549年)の実子である梁の簡文帝蕭綱(503-551年)とその文学集団が中心的役割を果たしたとされ、その代表作と先行作品を集めたアンソロジーが、蕭綱の文学集団に属していた徐陵が編纂した『玉台新詠』である。

しかし、齊梁艶詩は、早くも隋代において批判され始めた。更に唐の陳子昂や杜甫、北宋の蘇軾や南宋の朱子など、唐宋時代の有名文人たちが儒教思想に基づいて次々と痛烈な批判を加えたことにより、齊梁艶詩に対する批判は基本的に現代まで継承されてきた。現代の学者は齊梁艶詩が流行した原因を考察しているが、それらの結論は次のように集約される。「齊梁艶詩制作の主な担い手の多くは、皇帝・皇族・貴族および彼らに追従しようとした者たちである。彼らは儒教思想に違反した思想信条を持ち、頹廢的な生活を送っていたことが、彼らが制作した同工異曲で猥褻な艶詩に反映されている。このような齊梁艶詩は中国の伝統的な詩歌の歴史から乖離したものである。」

しかし、この説と矛盾する事実がある。蕭衍の実子である梁の昭明太子蕭統(501-531年)は、雅文学のアンソロジーである『文選』の主編者として知られる。彼は儒教思想に精通し、史書では暮らしぶりは慎ましかで女楽を好まなかったと記され、女性を題材とした陶淵明の「閑情の賦」という作品を「白玉の傷である」と批判している。ところが、この彼でさえ、「三婦艶」や「相逢行」という艶詩を残しているのである。彼だけでなく、齊梁艶詩の作者の中には、儒教の伝統的な文学観を基本的に継承した文学思想を提唱し、儒教に精通して研究書や注釈書を残し、後世の文人が執筆した伝記には品行方正であったと記された者も少なくないのである。これらの事実は従来無視されてきたが、齊梁艶詩が儒教思想から乖離したものではなく、むしろ儒教思想の伝統に沿ったものではないかという仮説を立てることを可能にするものであり、従来の齊梁艶詩の評価だけでなく、齊梁艶詩を異端とする中国文学史観に対する再考を促すものである。

齊梁艶詩の作品そのものに焦点を当てた

研究は、他の時代に比べて多いとは言えない。ここ数年、中国では何冊かの研究書が立て続けに出版された。それぞれ、独自の視点から齊梁艶詩の全体像を描き出そうとしているが、前掲の事実は無視され、概して個々の作品に対する詳細な考察が不足しており、結局のところ、結論における齊梁艶詩に対する位置づけは従来の研究の説と変わるところがない。

更に、齊梁艶詩は日本の古典文学、中でも『万葉集』のような上代文学や平安時代の貴族文学に多大な影響を与えたとする先行研究がある。しかし、それらの研究が上述したような偏った齊梁艶詩理解に基づいたものであれば、日本の古典文学への誤解に繋がっている恐れがある。以上のことから、齊梁艶詩の再検討は日中古典文学研究にとって急務であるといっても過言ではない。

2. 研究の目的

本研究者は上記のような問題意識から出発し、まずは齊梁艶詩を個別に研究することから始め、本研究応募時まで既に幾つかの研究成果を発表した。これらの先行研究で取り上げた作品群は南朝齊梁時代に特に数多く制作されたものであり、齊梁艶詩の代表的艶詩作品群の一つと位置づけられるものである。しかし、齊梁艶詩には、まだまだ数多くの作品があり、先行研究で論じ残した問題も幾つかあった。本研究では、上記以外の齊梁艶詩の作品を取り上げ、先行研究と同様の研究方法によって、それらの主題と制作の目的や背景、制作を支えた思想を明らかにし、これまで看過されてきた齊梁艶詩の本質とそれらの中国文学史における位置を再検討することを目指した。

3. 研究の方法

本研究における基本的な研究方法は本研究者の従来の方法を継承しているが、具体的には以下の通りである。まず研究対象作品に共通して見られる特徴的表現やモチーフをまず抽出し、文献資料や出土資料を参照しながら、それらの淵源を辿ってその意味を探り、結果を総合して作品の主題を考察した。その後でそれら模擬作品の制作が齊梁時代に流行した原因や思想的背景を探った。

また、南朝梁の蕭綱における「言志」文学の再定義を行うために、「述志」という題名を持ち、彼の死の直前に制作された作品を分析した。そして、その結果と彼の平時の「言志」作品と他の詩人による「言志」の用例とあわせて比較対照し、蕭綱における「言志」の意味とその中国文学思想史における位置づけを行った。その後、以上の作品研究と文学思想研究を踏まえ、齊梁艶詩の代表的詩人である蕭綱の「文章放蕩論」を精読してその再解釈を行い、齊梁艶詩制作を支えた思想を考察した。

4. 研究成果

下記[雑誌論文]では中国南朝時代に流行した「艶詩」群の一つである楽府「白紵舞歌」を取り上げた。この作品には宴席上の舞が描かれるが、そこに鳥の比喻が用いられることが多い。同時期のその他の作品でも同様である。本年度はまずこの特徴的比喻の淵源を辿った。その結果、その比喻は祭祀歌を淵源とすることが判明した。祭祀において、神霊を降臨させる舞を舞う者は鳥の羽を身につけており、その様子は古代祭祀歌にも歌われていた。祭祀においては神霊を降臨させて饗応し、祭祀する側の人々が和合し、福祥を得ることが目的とされた。現存最古の「白紵舞歌」の舞の描写にも鳥の比喻が見られると同時に、この舞は神霊を降臨させ、人々は和合する、という句も見える。以上のことから、「白紵舞歌」の舞の描写における鳥の比喻とは、作中の舞に祭祀における舞を重ね合わせ、作品が制作されたであろう宴あるいは王朝の人々の和合を言祝ぐものであったと考えられる。

上記の作品の他にも、南朝時代の「艶詩」の中には祭祀および祭祀歌を淵源とする作品が見られる。例えば、南朝梁の詩人、徐勉が残した「迎客曲」「送客曲」という一組の作品である。下記[雑誌論文]と[学会発表]はその一組の作品を取り上げた。研究の結果、各々の作品の淵源は祭祀歌の「迎神歌」「送神歌」であることが判明した。従来、宗教社会学の研究において、祭祀を含む儀礼とは、日常とは異なる場であると考えられてきた。また、徐勉の伝記が伝えるエピソードから、彼が宴についてもただの娯楽や一行事として捉えるのではなく、日常と隔絶した特別な場と捉えていたことが分かる。彼の「迎客曲」「送客曲」には、宴と日常との間に一線を引こうとする彼の思想が表れていると考えられる。更に重要なのは、そのような宴の場で多くの「艶詩」が制作されたことである。従来の研究では南朝時代の「艶詩」はそれまでの詩歌や文化の「伝統」から乖離した頹廢的なものとして考えられてきたが、本年度の研究成果はその説に大いに再考を促すものである。

[雑誌論文]とは楽府「洛陽道」「長安道」の研究から生まれたものである。この二種類の作品群から特徴的表現を抽出したところ、それらの中に同じく大都市を舞台とした三国魏・曹植の「名都篇」という作品を典拠とする表現を発見した。このことから、南朝時代の「洛陽道」「長安道」研究のためには、それらに大きな影響を与えたと考えられる曹植「名都篇」の主題について研究する必要性が生じた。そこで[雑誌論文]ではこの作品に関する先行研究の言説の当否を検討し、そこからこの作品の特徴的表現やモチーフの淵源を調査し、この作品の主題を再検討した。その結果、この作品は作者の在りし日の友人たちと遊楽を享受した日々を回想し

てそれを作中の登場人物たちに投影し、そのような幸福な時間の再来への願いを結晶化させたものであると考えられる。

曹植「名都篇」末尾に見られる「都に還る」というモチーフは後世の「洛陽道」に継承されている。それに対して「長安道」では「都に留まる」という伝統的なモチーフが見られる。双方とも都を定点とし、人流の固定点・帰着点とする認識をその根底に持つと考えられる。それに対して、[雑誌論文]で取り上げた、南朝時代に流行した民間の歌謡では、地方都市は人が頻繁に出入りするという流動性が強調されている。しかし、南朝梁の詩人による民間歌謡の模擬作品に見られる地方都市は、人流の固定点・帰着点として描かれており、その性質が根本から変更されている。この変更は“俗”の“雅”化と言える。これまで南朝「艶詩」はむしろ「俗」を志向するものと考えられていたが、上記の結果はその説に修正を促すものである。

[雑誌論文]で取り上げたのは、桑摘みの女性が主人公である楽府「陌上桑」の南北朝時代の模擬作品である。南朝梁陳期の詩人である張正見が制作した「艶歌行」は、『楽府詩集』では「陌上桑」系列の作品群に属している。この作品に見られる「夫の帰宅」という特徴的要素は他の陳代詩人の「陌上桑」の模擬作品には見られず、青年期に張正見が所属していた文学集団の領袖、梁の蕭綱の模擬作品に始まるものであった。そして、この要素は夫婦の幸福を頌するものであり、夫婦など家族の幸福を象徴的に描くことは、国家の平和を祈念するものであった。以上のような梁代文学の傾向が張正見の「艶歌行」にも影響を与えたと考えられる。

[学会発表]で本研究者が取り組んだのが、梁の蕭綱における「言志」の意味の再検討である。死の直前、幽閉中に蕭綱が制作した作品として詩歌「被幽述志」一首と「連珠」三首が残されている。これらの作品に見られる特徴的表現から、蕭綱の思想の根幹は儒教にあったことが理解される。彼にとって死は儒教の王国である梁朝との永別であり、文学活動を共にした文学集団のメンバーとの別れであった。そのことを題材とした詩歌には「述志」という題名が付された。本研究と本研究者の以前の研究の成果から、蕭綱にとって「言志」とは「集団と自分との位置関係を示す」ことであり、平時に文学集団のメンバーと制作した艶詩も、メンバーから引き離されて幽閉中に制作された「被幽述志」も、両極端ではあるが彼にとって「言志」作品であった。そしてこの「言志」は伝統的な儒教の文学思想に違反するものではなかったと位置づけることができる。

以上の研究から、南朝梁の蕭綱らの艶詩作品とその制作を支えた思想の両者ともに伝統的な儒教思想に基づくものであったことが確認された。この成果は、蕭綱らの艶詩が儒教思想から乖離したものである、という従

来の説に再考を促すものである。

今後の研究の展望として、以下の三点を挙げる。まず、本研究では取り上げることができなかった種類の作品群を研究しなければならない。次に、蕭綱が編纂に大きな影響を与えたとされる、南朝梁までの艶詩を収録したアンソロジー『玉台新詠』の研究を行う必要がある。特に、近年、中国において従来の説とは異なった説が発表されたが、その当否も含め、本研究者のこれまでの研究の延長として、このアンソロジーを全面的、多面的に研究することが必要である。最後に、儒教における文学思想の再検討である。本研究の成果によれば、蕭綱らの文学作品とそれを支えた思想は儒教に基づくものであった。その一方で、蕭綱らの文学を批判した人々も儒教思想に基づいていた。初歩的な考察としては、この立場の分岐の原因は、儒教思想そのものの中に求めることができるのではないかと考えることができるが、更に精密に一步踏み込んだ研究を行う必要がある。

今後も以上の研究を行うことによって、中国文学史、更には中国思想史に再検討を迫る成果が得られると考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

大村和人「夫の帰宅 南北朝後期の「羅敷古辞」模擬作品について」、『六朝学会報』第15集、査読有り、2014年刊行予定(掲載決定)。

大村和人「南朝梁・蕭綱の西曲模擬作品再考」、『高崎経済大学論集』第56巻第3号、査読有り、2013年12月、p1-13。

大村和人「「都」への帰還 曹植「名都篇」再考」、『三国志研究』第7号、査読有り、2012年9月、p58-73。

大村和人「宴という「別天地」 徐勉の「迎客曲」「送客曲」について」、『中国文化 研究と教育』第70号、査読有り、2012年6月、p56-68。

大村和人「鳥の舞 「白紵舞歌」 晋古辞の文学史上の位置について」、六朝学会『六朝学会報』第13集、査読有り、2012年3月、p19-35。

[学会発表](計2件)

大村和人「南朝梁・蕭綱「文章放蕩論」試論」、六朝学会第28回例会、2014年3月、二松学舎大学。

大村和人「宴を「儀礼化」する 南朝梁・徐勉の「迎客曲」「送客曲」について」、中国文化学会月例会、2011年3月、大妻女子大学。

[図書](計0件)

[産業財産権]

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

[その他]

ホームページ等:

「researchmap」研究者ページ:

<http://researchmap.jp/hdacun>

6. 研究組織

(1)研究代表者

大村 和人 (OMURA, Kazuhito)

高崎経済大学・経済学部・准教授

研究者番号: 80431881

(2)研究分担者: なし。

(3)連携研究者: なし。